

あかるく かしこく たくましく

令和7年2月5日 No. 41 文責：校長 佐野紳二

2月になりました

早いものであっという間に1月が終わり、今日はもう2月5日です。明日から寒気の影響で冷え込みが予想されていますが、大寒から節分・立春と、二十四節気では少しずつ春が近づいています。

2月のことを、日本では如月（きさらぎ）と言います。なんだかとてもカッコいい響きですよ。6月に、「雨がたくさん降る季節なのになぜ水無月（みなづき）？」ということについて書かせていただきましたが、今日は1年の各月の和名（？）と、その由来について調べてみました。

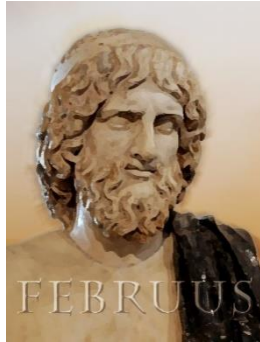
月	和風月名	由来など
1月	睦月（むつき）	「親戚が集まり仲睦まじくするから」「元つ月が転じた」「実月が転じた」の3つの説がある。
2月	如月（きさらぎ）	厳しい寒さに備え重ね着をする季節を意味する「衣更着（きさらぎ）」、段々と春に向けて陽気が来るのを意味する「気更来（きさらぎ）」、春に向けて草木が更に生えてくるという意味の「生更木（きさらぎ）」から転じたという3つの説がある。
3月	弥生（やよい）	「木草、弥や生ひ茂る月」を省略したもの。暖かくなり草木が生い茂るから。
4月	卯月（うづき）	卯の花が咲くことから「卯の花月」を省略したもの。ただ卯月に咲く花であるため卯の花と呼ぶという説もある。他にも諸説あり。
5月	皐月（さつき）	早苗を植える月であることから早苗月（さなえつき）が早月（さつき）になったというもの。「さ」が「皐」になったのは神に捧げる稲の意味がある。
6月	水無月 （みなづき）	「無」は「の」を意味し「水の月」であり、田んぼに水を引く月だというもの。「田んぼに水を引いて水が無くなるから」「暑さで水が干上がるから」といった説もある。
7月	文月（ふづき）	「文被月（ふみひろげづき）」が省略されて「文月」になったもの。「文被月」は短冊に歌や願い事を書く七夕の行事にちなんでいると言われている。ただ稲穂が膨らむことから「穂含月」「含月」が転じたという説もある。
8月	葉月（はづき）	現代の9月にあたるため、落葉や紅葉が始まる時期であったため「葉落ち月」と呼ばれていたものが「葉月」に転じたもの。
9月	長月（ながつき）	だんだんと日が短くなり夜が長くなっていくことから「夜長月（よながつき）」と呼ばれていたものが「長月」に転じたもの。
10月	神無月 （かんなづき）	水無月と同様「無」は「の」を意味し「神の月」であり、神を祀る月だというもの。他にも雷の鳴らない月という意味の「雷無月（かみなしづき）」が転じたという説や、新穀でお酒を醸造することから「醸成月（かみなしづき）」が転じたという説もある。
11月	霜月（しもつき）	「霜降月（しもふりつき）」が省略されて「霜月」が転じたもの。他にも満ちた数字の十を上月とし、それに対する「下月（しもつき）」が転じたという説などいくつかの説がある。
12月	師走（しわす）	師匠である僧侶がお経をあげるために東へ西へと馳せることを意味する「師馳す（しはす）」が転じたもの。他にも年が終わると意味の「年果つ（としはつ）」が転じたという説や、四季が果てることを表す「四極（しはつ）」が転じたという説もある。

いかがでしょうか？現在使っている「1月，2月…12月」の方がシンプルで分かりやすいのですが，こうした日本特有の言い方って，それぞれに意味があり，とても素敵だと私は思います。

さらに，2月の言い方が各国でどうなっているかもちょっと調べてみました。

日本を含む東アジア地域の月の言い方は「何番目を表す数十月」となっているようですが，欧米や西アジア地域では，ローマ神話に登場する慰霊祭 Februaria（フェブルアーリア：戦争の罪を清めるためのお祭り）の主神（フェブルウス）が由来となっているようです。

東アジアの人たちの方が合理的に物事を考えているのかもしれませんが，自然の移り変わりが月の名前に反映しているのは，おそらく日本だけで，これもとても素敵だと思います。



言語	表記	読み方
英語	February	フェブラリー
中国語	二月	アーユエ
韓国語	이월	イウォル
スペイン語	febrero	フェブレロ
フランス語	février	フェヴリエ
アラビア語	فبراير	フェブラール
ロシア語	Февраль	フェブラーリ
ポルトガル語	fevereiro	フェヴェレイロ
ドイツ語	Februar	フェーブルアール
イタリア語	febbraio	フェブライオ
ラテン語	Februarius	フェブルアリウス

今年の節分はどうして2月2日だった？

例年，節分は2月3日なのですが，今年は2月2日が節分でした。「どうして？」と思った方も多かったかと思いますが，もちろんこれにもきちんとした理由があるようです。

節分は「季節を分ける」と書く通り，季節の変わり目に設けられた雑節（二十四節気以外に設けられた季節を表すための日付。節分以外には彼岸や土用，八十八夜などがある）です。そして季節の変わり目の日付を表すのは「二十四節気」であり，二十四節気の中には立春・立夏・立秋・立冬という季節の始まりを示す



ことばがあります。節分は「季節を分ける」と書きますが，そもそもこの4つの季節の始まる前の日を指すことばで，このうち，春の始まりを表す立春の前日だけが「節分の日」として私たちの生活に残りました。

ただ，地球が太陽の周りを1周するのは365日ぴったりではないため，4年に1度，うるう年で調整していますが，それでもズレはなくなるため，立春がズレ，節分の日もズレることがあるのだそうです。

地球は約365.2422日かけて太陽の周りを一周しています。

しかし私たちが使う太陽暦は365日を基本とし，4年に1度閏年で366日を入れるなどして近似値に合わせています。とはいえ微妙に誤差が溜まり，1年ごとに「太陽と地球の位置関係が同じになる時刻」が少しずつ前後してくるのです。

そうした積み重ねで，立春の日時が2月3日側にずれ込む年が生まれ，結果的に前日の節分が2月2日になるパターンが起こるといえるわけです。

ちなみに，前回節分が2月2日だったのは2021年でした。割と最近だったのですが，この年は新型コロナウイルスの感染拡大が始まった年だったので，あまり話題にならなかったように記憶しています。その前に節分が2月2日だったのは1897年で，何と2021年の124年前でした。次回，節分が2月2日になるのは2029年で，今後しばらくの間はうるう年の翌年が2月2日になることが続くそうです。